

情報社会は今の社会とは非連続 先手を打って課題の解決を

委員長 岩田 彰一郎

アスクル
取締役社長兼CEO



1950年生まれ。73年慶應義塾大学商学部卒業後、ライオン油脂（現ライオン）に入社、ヘアケア商品開発等を担当。86年プラス入社、92年プラスの新規事業アスクルの開始にあたりアスクル事業推進室室長に就任、97年アスクルの分社設立とともに取締役社長、2000年取締役社長兼CEOに就任。2000年6月よりマネックス・ビーンズ・ホールディングのアドバイザリーボード、2003年5月よりエヌ・ティ・ティ・ドコモのアドバイザリーボードのメンバーを務める。2006年6月より資生堂社外取締役を務める。
2003年経済同友会入会、2004年度より幹事。2003年度新規事業創生委員会副委員長、2004年度同友会起業フォーラム企画運営委員、2005年度同友会起業フォーラム委員長、2006～2007年度ITによる社会変革委員会委員長。

持続可能な社会の実現に向け ITを戦略的に活用すべき

今、私たちが直面している「IT革命」は、「産業革命」と同様の、またはそれ以上の非常に大きなインパクトを社会全体にもたらします。その本格的な変革の波が日本社会に押し寄せるのはこれからです。その時に、大きな波に巻き込まれてしまうのではなく、新しい時代の日本はどうあるべきかというビジョンを踏まえて、新たな社会のあり方、方向性、価値観、ルール、体制、教育など「情報社会」の構築に向けて強い意志をもって臨まなければなりません。この近代工業社会から情報社会への移行という歴史的変換点にあって、すべての人が本当に幸せになれる社会の方向性を見出していくのが、当委員会のテーマです。

30年先の社会を想定し そこから現在を見つめ直す

今の社会がこのままの状況で推移すれば、機能不全を起し、日本はグローバル競争から取り残され、環境問題をはじめとした様々なリスクに直面するワーストシナリオになりかねません。持続可能な社会に陥らないための新たなシナリオを構築し、コンセンサスを作れるかどうかという、非常に重大な分岐点にいるのです。

この岐路にあって我々は、ITというツールを戦略的に使い、たくさんの方の叡智結集のサイクルを形成し、持続可能な社会の実現に向けていかなければなりません。オープンなコミュニケーション、情報のリンクとシェアが、新しい社会の枠組みやこれまで想像しえなかったコミュニティを生み出し

副委員長（役職は8月7日現在）

- ・荒川 亨
（ACCESS 取締役社長）
- ・碓井 誠
（フューチャーアーキテクト 取締役副社長）
- ・木川 眞
（ヤマト運輸 取締役社長）
- ・三木谷 浩史
（楽天 取締役会長兼社長）
- ・村上 輝康
（野村総合研究所 理事長）
- ・森 正勝
（アクセンチュア 取締役会長）

委員67名

（インタビューは7月25日に実施）

ていくことでしょう。人々の正しい価値観や強い意志があれば、ITを活用して新たな理想の社会の実現に近づけると思うのです。

大きな変革をきちんと捉えるには、どれくらいのレンジで考えるかが重要な点ですが、当委員会は30年というスパンを設定しました。携帯電話やSuicaが実用化までに要した時間や、次の時代を担う子どもたちの教育のことを考えると30年は決して短いスパンではありません。2006年度は、30年先の社会のあるべき姿を明確にするところから議論を始めました。その上で、30年後から現在を照射し、今なすべきことを考えていきます。従来の工業社会において作り上げた制度や価値観と、来るべき情報社会の仕組みや価値観とは、非連続なのだと考えています。この点をしっかりと認識し、未来からの視点で先手を打って、今解決すべき課題に対処していかなければなりません。

明確な時代認識を持った素晴らしい委員の方々に恵まれ、実に活発な議論が行われています。今年度は、これらの議論を具体的提案に結びつけ、少しでも社会の役に立てればと思っています。